

『平家物語』
と唱導文化との関わりについての総合的研究
-後白河法皇をめぐる唱導の観点から-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2019-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 牧野, 淳司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20222

『平家物語』と唱導文化との関わりについての総合的研究

——後白河法皇をめぐる唱導の観点から——

牧
野
淳
司

Research on the Inter-connections between Buddhist Preaching
 (*Shōdō*) Culture and the *Tale of the Heike*
 Focusing on Preaching Regarding the Dharma-king, Go-shirakawa

MAKINO Atsushi

The Dharma-king, Go-shirakawa is a leading actor of the *Tale of the Heike*, albeit in the shadows, and an individual to be closely examined in the context of considering the goal of the creation of the narrative. Parallel to this, it should be mentioned that the preaching of priests such as Chōken and Bengyō were centered around the Dharma-king, Go-shirakawa, and heavily influenced said narrative. Thus, the Dharma-king Go-shirakawa is one conduit which connects the *Tale of the Heike* and Buddhist preaching. This paper aims to evaluate the inter-relationships between the narrative and preaching from the vantage of preaching regarding Dharma-king Go-shirakawa

To examine the presence of the Dharma-king Go-shirakawa in the preaching of Chōken, the version of the *Tenpōrinshō* possessed by the National Museum of Japanese History was chosen as the subject of investigation as the premise for the current paper's remarks. This work contains 81 *hyōbyaku*, statements of the chief purpose of a Buddhist assembly read out before an audience, but only one was created for Dharma-king Go-shirakawa. However, when reading other *hyōbyaku*, Chōken frequently mentions Go-shirakawa, even if he was not present at that particular assembly. Buddhist assemblies and memorials were possible to be held under the blessings and auspices of Go-shirakawa, and the people returned that favor in kind. Chōken placed assemblies and memorials which took place in a variety of circumstances into this framework.

Through close readings of materials related to Chōken and Bengyō, the form of Dharma-king Go-shirakawa comes into focus. That is, the form of an abdicated emperor that has joined a holy order, who has outlived his children and kin, and who lives feeling the melancholy born of the impertinence of all things. Resulting in an absorption and completion of Buddhist training, the abdicated emperor became a person elevated to Buddhahood, complete with the power to drive out vengeful spirits. Chōken and Bengyō refer to the abdicated emperor as the existence of a Buddha with a living body. These tribulations and overcoming of vengeful spirits are detailed in the *Tale of the Heike*, and the representation of Go-shirakawa in the narrative can be said to inherit the vision of Go-shirakawa put forth in the preaching referred to above.

If the image of the abdicated Go-shirakawa has indeed been inherited from preaching sources, then the entire character of the narrative's relationship to this Buddhist preaching must be studied. In that instance, the elegiac viewpoint becomes important. Until the current point, elegiac rites have been looked at from the position of both the quick and the dead, from the standpoint of preaching, elegies of threat and persuasion both must be considered in their context within Buddhist preaching.

『平家物語』と唱導文化との関わりについての総合的研究

— 後白河法皇をめぐる唱導の観点から —

牧野淳司

一、はじめに

『平家物語』が唱導（仏の教えを広く説く行為）と深い関係を持つことはよく知られている。天台僧澄憲を祖とする安居院流の唱導書が、『平家物語』のいくつかの場面に引用されていることが早くから指摘されている^{*1}。また、本文を引用するのみでなく、先例列記などの唱導の技法（手法）が物語を作り出していることも明らかにされている^{*2}。さらに最近では、唱導研究の内実が深まりをみせている。唱導の言葉（内容）のみならず、絵画や造型物、身体所作など、唱導に関係する諸文化を総体的にとらえ、かつ、アジア全体を見渡す視座からその意義を追究する試みなどが出てきた^{*3}。このような中、筆者も唱導資料の発掘を進めながらその価値を明らかにし、かつ『平家物語』との関係性について考察する試みを継続してきた^{*4}。そのような作業を経て、あらためて重要だと認識するに至ったのは後白河法皇の存在である。

『平家物語』にとって後白河法皇はどのような存在か。二〇一〇年刊行の『平家物語大事典』^{*5}では、後白河法皇について、次のように記述

している。

後白河院は、さして集中的に描かれるわけではないが、『平家物語』のほぼ最初から最後まで登場する唯一の人物であり、物語の陰の主役であるといってもよい。物語は、院に対して時に批判的でありながら、おおよそ院の立場に寄り添って事件を語る。

『平家物語』が何のために作られたか、誰のために作られたか、どのような場で作られたか、といった問題を考える時、「物語の陰の主役」と言われる後白河法皇の存在は無視できない。物語が彼をどのように描いているか、また、どのように評価しているか、物語の性質を見定める際の重要な論点の一つである。

当然ながら、『平家物語』の後白河法皇については、これまでに多くの論がある。物語を丹念に読解する方法や、日本史学の成果を踏まえつつ、他の史資料が伝える後白河法皇像と比較する方法がとられた。それらを踏まえた上で、『平家物語大事典』は「物語は、院に対して時に批判的でありながら、おおよそ院の立場に寄り添って事件を語る」とまとめたのである。今のところ、『平家物語』は後白河法皇に対して時に批判的だが基本的に肯定的である、と理解しておけば大きく誤る

ことはないであろう。ただし、問題が残されていないわけではない。『平家物語大事典』は、「後白河院がこの物語の理解において重要な鍵を握る人物であることは疑いない」と項目を締めくくっている。考究の余地がまだ存在することを匂わせている。

一方、唱導研究においても後白河法皇は無視できない。なぜならば、『平家物語』に多大な影響を与えた唱導僧である澄憲や弁暁は、後白河法皇のすぐ側で活動していたからである。澄憲は後白河法皇の「寵僧^{*6}」と言われた人物で、彼の唱導は後白河法皇を中心に展開していたと言つてよい。そのことは最近紹介した国立歴史民俗博物館所蔵の『転法輪鈔^{*7}』を見ていても感じられる（この点は、次節で述べる）。十二世紀の後半、澄憲や弁暁、貞慶といった説経僧が登場し、数多くの唱導資料が作成されることになった。それらは宗派を越えて書写され、後世の唱導の規範となっていく。このような「説法道」が確立する動きの中心にいたのが後白河法皇である。

もちろん、後白河法皇については日本史研究の蓄積がある^{*8}。しかし、澄憲や弁暁の唱導資料を用いたものはほとんどない。唱導資料に未紹介のものが多く、唱導資料の資料的価値が明確には定まっていなことが、その理由として考えられよう。しかし、状況は少しずつ変わってきている。二〇一三年には弁暁草の翻刻が公刊された^{*9}。筆者は近年、国立歴史民俗博物館に所蔵される澄憲の表白集『転法輪鈔』の翻刻を公にした^{*10}。これらの唱導資料を用いた研究論文も発表^{*11}した。唱導資料の紹介・公刊が着実に進み、これらから後白河法皇について考究していくことも可能な環境が整いつつある。それにより、これまでとは異なる後白河法皇の姿が見えてくる可能性があるのである^{*12}。

以上のように、『平家物語』にとっても、唱導にとっても、後白河法

皇の存在は大きい。したがって『平家物語』と唱導との関係性を論じる際、後白河法皇は、重要な視座の一つとなるのである。本稿では、唱導資料から見えてくる後白河法皇像のいくつかを示し、それと『平家物語』との関係性について考察を進めてみたい。唱導僧が後白河法皇の周辺でどのような活動をしていたか、あるいは後白河法皇をどう評価していたかについて明らかにすることは、後白河法皇研究に新たな材料を提供するばかりでなく、『平家物語』についての新しい見方を示すことになる可能性がある^{*13}と考えている。

二、歴博本『転法輪鈔』の後白河法皇

唱導における後白河法皇と物語との関係について見る前に、十二世紀後半の唱導が後白河法皇を中心に展開した一面を持つことを、澄憲の資料から確認してみたい。取り上げるのは国立歴史民俗博物館蔵『転法輪鈔』である。本資料は全四帖からなる。堂供養関係表白を集めた二帖、密教修法関係表白を集めた一帖、松殿基房主催仏事の表白を集めた一帖である。四帖に合計で八十一篇の表白を収録しているが、このうち後白河法皇が施主となった法会の表白は一篇である。その点からすれば、歴博本は後白河法皇とは関係の薄い資料に見える。たとえば、金沢文庫保管の『転法輪鈔』には「後白河院」帖があり、後白河法皇が主催した法会の表白を集めている。「後白河院」帖の存在は、澄憲が後白河法皇のための唱導を多く展開したことを示しているが、歴博本四帖は、後白河法皇と関わりない場でも澄憲が精力的に活動していたことを伝えている。澄憲が多様な施主の要請に応じ、その場に合わせた唱導を行っていたことは間違いない。しかし、歴博本に含まれるいくつかの表白を見ると、後白河法皇が不在の場においても、澄

憲の唱導では法皇が重要な存在であったことが見えてくる。

この点について、四帖のうちの一帖である「堂供養下」帖で示してみる。この帖は、俗人の堂供養を中心に集めたもので、二十五篇の表白を収録しているが、数多くの施主が登場している。ここに後白河法皇がどのように登場するかを見ることで、澄憲の唱導における後白河法皇の存在感が見えてくる。^{*14}二十五篇の表白の施主を示すと以下の通りである。平盛子女房、藤原公能室、平政子（二篇）、藤原実定、藤原隆季、藤原資長、藤原重家、藤原修範、平基親、安倍泰親、安倍業俊、安倍泰茂、大江信忠、賀茂重保、平棟範、北条時政、菅原在茂、大江某、源顕信、北条政子（実質は源頼朝）、藤原兼実、某僧（大法主上人）、藤原能保安尼公、惟宗定景室、合計で二十四人である。澄憲がさまざまな階層の人々の請に応じ、多様な人脈、場の中で活動していることをよく示している。このうち、何篇かの表白に後白河法皇が出る。

その一つは藤原修範のための表白である。修範は堂舎建立とそれに伴う阿弥陀三尊供養の功德を最初に後白河法皇に捧げている。自身を含め一門の兄弟が昇進し、この世の榮分を手にすることができたのは後白河法皇の恩恵があったからであると表白では述べられている。修範は信西の五男で澄憲の異母兄弟にあたる。信西一族は後白河法皇の庇護をうけていたが、おそらく一族が催す仏事ではしばしば法皇に対する報謝の思いが披露されたに違いない。そのような活動の一翼を、表白を作成し導師を勤めることで澄憲は担ったと考えられるのである。また、大江信忠も法会の善根の大部分を後白河法皇に捧げている。澄憲は大江信忠について、「大施主殿下、多生の厚縁に依て、久しく太上天皇の龍顔に近づき、宿生の深き契りを以て、厚く無涯不次の恩沢を蒙る」と述べている。^{*15}長年にわたって後白河法皇に近侍し、多

大な恩を受けたがゆえに、功德を後白河法皇に捧げるのである。ここからは後白河院近臣が仏事を行う場合、しばしば功德が後白河法皇に捧げられていたこと、そのような活動に澄憲が関与したことがうかがえる。

後白河法皇の近臣でない者の法会では、たとえば、北条政子（実質は源頼朝が施主）のための表白に後白河法皇が出ている。北条政子（源頼朝）が鎌蔵薬師堂（永福寺薬師堂）を供養した際の表白である。その時に頼朝は、後白河法皇のために特別に金字紺紙法華経を書写供養したという。それは「忝くも法皇の龍顔を拝し、不次の抽賞に預」った恩徳に報いるためであると表白は記している。法皇に多大な報謝の気持ちを持つ頼朝の姿が法会の場で広められているのである。もちろん澄憲がこのような表白を執筆したのは、頼朝の仏事が後白河法皇のためという一面を持っていたからであろう。^{*16}ただ、このような頼朝像が法会を通して世間に流通していったことは間違いない。このほか、菅原在茂については、今日このような大善を催すことができるのは、天満天神の恩、後白河法皇の恤、善友の勧めがあつたことであると澄憲は述べている。そのため、功德の一部はやはり後白河法皇に捧げられている。

澄憲の活動、人脈の中心には常に後白河法皇がいた。さまざまな人々が催す仏事法会を後白河法皇の庇護・恩徳によるものとし、また、後白河法皇の恩徳に報いるためのものとする。そのようなことを澄憲は、しばしば行っていたと予測されるのである。

このように、後白河法皇とは無関係に行われたように思われる仏事法会においても、澄憲が法皇のための言葉を繰り返して発信していた形跡が確認できる。澄憲の唱導にとって法皇が重要であると考えられる所以である。ここで詳しく論じることができないが、同様のことは弁曉に

ついても言えると思想している。以下では、唱導の場で澄憲や弁暁がどのような法皇像を作り上げていたか、『平家物語』との関係性に触れながら確認していきたい。

三、喪失感とともに生きる法皇

弁暁草のうち「後白河法皇廻向」帖^{*17}は、近親者を亡くした後白河法皇のことを次のように語っている。

（前欠）親経が書きたるこそ候ふめれ。実に至極の理を書き候ふ。

「四代前朝の子たり孫たる、我に先んじて行善の人と成る。戚属臣妾の老いたる有り少き有り、半ばを過ぎて永夕の別れを告ぐ」。実にさる事は候はずや。二条院以後四代の先朝聖霊、皆君の御子御孫と御しましながら、幼少若年の御齡を以て次第にかうはらはらと隠れ去り御します事、実にはいかなる次第にか候ふらむ。万人皆夢を見る心地こそ候へ。又、高松院、建春門院、皆是君の辺の御をとと、余年千秋万歳と願しましつべく御しましし君、それもかう成り御ましぬ。まぢかう召し仕はれし公卿侍臣地下北面、実に残るは少なう、往きたるは員も知らず候ふ。東岱喪股の煙朝に昇り、北芒新旧の露御しますも悲しく今も悲し。終を送る鐘の声は耳に満ちて弥よ悲しく、空に聳える雲の色は眼に遮りて涙在り。

最初に、藤原親経作の願文を引用している。そこに書かれていることを、全くその通りだと述べた上で、周囲の人に先立たれた法皇の境遇を説明している。二条・六条・高倉・安徳の四代天皇はみな後白河法皇の子であり孫であったが、次々と世を去ってしまった。高松院・建春門院にも先立たれ、身近で召し仕っていた公卿侍臣地下北面も多く

は死去してしまったという。大勢の近親者に先立たれて無常を実感し、悲しみを抱いて生きる法皇の姿が描かれている。

ここで想起されるのは、延慶本『平家物語』第三本（巻六）の一節である^{*18}。

永万元年七月に第一の御子、二条院も失せさせ給ひにき。第二の御子高倉宮、治承四年五月に誅たれさせ給ひぬ。現世後生と憑み奉り給ひつる第四の御子、新院さへかやうに先立ち給ひぬ。今はいとど御心よわくならせ給ひて、何なるべしとも申し召しわかず。老少不定は人間のならひなれども、前後相違は又、生前の御恨みなほ深し。翼鳥、連理の枝と、天に仰ぎ、星を指して、御契り浅からざりし建春門院も、安元二年七月七日、秋風なさけなくして、夜はの露と消えさせ給ひしかば、雲のかけはしき絶へて、あまの河のあふせをよそに御らむじて、生者必滅、会者定離の理を深く申し食し取りて、年月を隔つれども、昨日今日の御別れのやうに申し食して、御涙も未だかわきもあへず。此の御歎きさへ打ちそひぬるぞ申す量りなき。近く召し仕はれし輩、むつまじく申し食しし人々、或は流され、或は誅せられにき。今は何事にか御意をも休めさせ給ふべき。

高倉院の死去に続く場面であるが、後白河法皇が二条院、高倉宮（仁王）、新院（高倉院）を次々と亡くしたことを述べている。「御心よとも死に別れたこと、近臣の多くを失ったことを述べている。「御心よわく」なり、涙も乾かず、何事にも心を慰めることのできない法皇の姿が描かれている。このような部分を見ると、唱導によって描かれた後白河法皇像が延慶本『平家物語』に何らかの経路を経て影響を及ぼしていると考えたくなる。

延慶本はさらに続けて、後白河法皇の心中を以下のように述べてい

る。

法皇の御心中、申すも愚か也。「我十善の余薫に酬ひて、万乗の宝位を忝くす。四代の帝王、思へば子也、孫也。いかなれば万機政務を止められて、年月を送るらむ」なむど、日来御患ひのやすむかたなかりける上、新院の御事さへ打ちそひぬれば、内外につけて思し召ししづませ御します。

このような「法皇の御心中」はどのように作られたのであろうか。高倉院を失った際の悲しみは周囲の人々に洩らされたであろう。弁暁はそのような法皇の気持ちを知っていた。そして法会場で、法皇の悲しみを語ってみせた。法会に参列した人々は、弁暁の言葉で法皇の心中を理解したのであろう。法会場で読まれる表白によって、唱導僧が語る後白河法皇像が世間に広まっていく。『平家物語』の語り手は、このようにして共有された後白河法皇像を引き継いでいると考えられる。悲しみを抱き、無常を実感しながら生きる法皇像は唱導を出発点として生み出されていったとみてよいであろう。^{*19}

四、仏道修行に励む法皇

後白河法皇が君臨していた時代は、国中で数多くの戦乱が起こっていた。唱導者の立場からは、そのような世に求められるのは仏法を篤く信仰し、仏法の力で国を統治しようとする王であったに違いない。その期待を背負ったのが後白河法皇であった。仏道修行に励む理想的法皇としての後白河法皇像が、唱導によって生み出されていることを、弁暁の資料を通してうかがうことができる。

弁暁の説草「後白河院 嵯峨釈迦堂八万部御経供養」帖は、^{*20} 仏教界における後白河法皇の功績を詳細に述べている。東大寺大仏殿と大

仏を再興したこと、八万部の法華経を誦したことに触れ、他国にも類を見ない空前絶後の功德であると称讃しているが、列挙された法皇自身の勤行内容を示すと以下のようなになる。

法華護摩一万三百五十五座・日数八千四百八十ヶ日・法華懺法の御誦誦一万一千五百卅卷・阿弥陀経御転読十六万六千九百六十六卷・百万遍御念仏二百餘度・諸尊護摩御供養法・率都婆造立・千手経御誦誦・毎月御修法・或千日講御打聞

膨大な数の勤行に加え、その修行の様子は、「夜も五更を越えずとも、御寝成る事は只刹那須臾、残りは皆御行法にてあかしくら」すほどであったと述べられる。老齢に到り体が弱っていく中、周囲の者が心配するのも聞かず、ますます修行にのめり込んでいく法皇の姿も印象的に語られる。さらには、四天王寺の千僧供養に参列し、金堂へ向かう後白河法皇を、人々が「皆只生身の尺迦仏を押し奉る」としてこそは、涙を流し喜び合ひたる事であったと述べている。ここで弁暁によって発信されるのは、厳しく困難な仏道修行を成し遂げ、四天王寺でそれを完成させた法皇の姿であった。

このような法皇像から想起されるのは、延慶本『平家物語』第二本(巻三)に語られる法皇御灌頂の物語である。ここには熱心に仏道修行に励む法皇の姿が描かれている。

後白河法皇、忝くも観行五品の位に心を懸けましまして、法華修行の道場、五種法師の燈を挑げて七万八千余部の転読なり。上古にも未だ承り及ばず。何ぞ況や末代にをいてをや。十善玉牒の御衣の色、三密護摩の壇にすすけて、即身菩提の聖の御門とぞみへさせ給ひける。

法華修行の様子を述べているが、「七万八千余部」という誦誦の部数の多さを強調している。これほど熱心な修行者は、上古にも聞いたこ

とがない。まして、末代にはあり得ないと讃えられる。その他、勤行内容は、

両界の方だら・廿五壇の別尊法・三密瑜伽の行法・護摩八千の薫修・光明真言・尊勝だらに・慈救呪・宝篋印・火界真言・千手經・護身結界・十八道・仁王般若・五壇法

と列挙されている。法皇の勤行内容を一々数え上げ、その修行ぶりを強調している。このような仏道修行にのめり込む法皇の姿は、法会の場で唱導により発信された法皇像を継承していることと見ることができよう。

これほどまでに後白河法皇が仏道修行にうちこんだ理由は何か。戦乱で命を落とした人の靈魂が問題であった。反逆者を生み出し、国を戦渦に巻き込んだ責任は法皇にある。亡魂に不安と怖れを感じ、それが浮かばれるように供養を営む法皇の姿も弁曉の唱導資料に描かれる。法皇は死者の靈魂が悪鬼・怨霊となつて禍をなすことを阻止しようとした。と同時に、法皇は、それらを寄せ付けない力を入れる努力をしていた。唱導によれば、世を乱す存在は、天魔・魔縁・悪鬼・邪神・怨霊である。天魔・魔縁はもともと仏法に障碍を為す存在であったが、平安時代末には怨霊と同一視され、人に取り憑いて、王法と仏法を破壊しようとする存在とみなされた。それらと対峙するためには、並一通りでない仏道修行が求められた。法皇が熱心に仏道修行したのは、天魔・怨霊を退ける力を入れるためであった。弁曉の資料には、その成果を手にし、四天王寺で生身の釈迦仏のように拝される後白河法皇の姿があった。

そして、このような法皇の姿も『平家物語』の後白河法皇像と重なりあう。延慶本『平家物語』「法皇御灌頂事」の章段は、熱心な仏道修行により天魔を克服し、四天王寺で「金剛仏子の法皇」、「即身成仏の

玉躰」となる後白河の物語である。延慶本はこの章段で、天魔を寄せ付けない真の「法皇」が誕生したことを語っている。その結果、崇徳院・藤原頼長・源為義らの怨霊は法皇の御所へ入るのをあきらめた。その代わりに、清盛の屋敷へ侵入したことにより清盛は悪行を加速させたのである（延慶本『平家物語』第二本（巻三）「入道卿相雲客四十余人解官事」^{*21}）。

五、末代衆生を救済する法皇

後白河は天魔を克服し、金剛仏子の法皇となった。それを唱導の言葉で言祝いだのが弁曉であった。あるいは、弁曉によって生身の釈迦仏のような存在の法皇が誕生させられたと言った方がよいかもしれない。そして、理想の法皇像を作り出す営みは澄憲の活動にも確認することができる。ここでは、四天王寺で後白河法皇が逆修を行った時の澄憲の説法を参照してみる。金沢文庫保管『釈門秘鑰』に収められたもので、法皇はこの時、阿弥陀像を造立して供養した。その新造の仏像について、澄憲は次のように言う。

今推する所は、極楽化主弥陀は東門を出でて、遙かに敬田院御齋筵を眺望し、今度新造の弥陀は、天王寺西門に向ひて、西土本仏に謁し奉り御すらん。我君の御本願より、本仏・新仏懇懃に相議して、利生方便を議定し給ふらん。

ここで語られるのは、西方極楽世界の阿弥陀如来（本仏）と新造の阿弥陀如来像（新仏）とが顔を合わせ、法皇、およびこの国の人々を救済する手段を相語らう光景である。この後、澄憲は、世界最初の仏像とされる優填王の梅檀釈迦像（木像仏）が、切利天から釈迦（生身仏）が降りてきた時に、宝階の下に跪いて礼拝し、生身仏と種々の対話を

して、衆生の救済を託されたという物語（優填王釈迦造像譚）を語る。木像仏がまるで生きているかのように動きだし、生身の釈迦と対話する場面を語りながら、それと同じように、法皇の造立した仏像も西方の真仏と対話しているであろうと、澄憲は語ってみせる。

今又此のごとく云ふべし。西方生身阿弥陀如来、此の木像阿弥陀如来と、互ひに敬儀を致し御しまして、西方真身仏は仰せ候べき様、我浄土の真身たりと雖も、只今法皇に見みへ奉ること能はず。汝形像たりと雖も、面り法皇御本尊たりて見え奉り給へば、法皇百廿年娑婆に在る間は、汝が利益我に勝れり。我は敬田院西門に冥に影向すと雖も、顕れて見え奉らじ。利益既に勝劣有り。感応亦隠顕有り。故に、先き立ちて道場に帰り給ふべし、道場に住し給ふべしとや、仰せ候らんと覚え候ふなり。故に、此の形像当時は西方真仏に勝れ奉り給ふべしとこそ覚え候へ。

このような想像上の光景を法会の場合に出現させることで、新造の阿弥陀如来像は単なる仏像ではなくなる。法皇とこの国の衆生を救済する力を持つ、生身の仏像が出現するのである。それは澄憲の唱導の言葉によって生み出されたのである。

生きた仏像を生み出す澄憲の営みはさらに進んで、法皇自身を生身の仏とみなすまでに至る。建久二年（一一九一）八月、後白河法皇は清涼寺に参籠し法華八講を行った。金沢文庫保管『転法輪鈔』「嵯峨清涼寺御八講表白」「八講結願第八座 為聖旨講草之」²³では、優填王釈迦造像譚に触れた後、後白河法皇の臨幸を讃えて以下のように言う。

尺尊昔撫此像頂、付属我朝衆生給。
此仏今摩法皇頂、付属我朝衆生給。

清涼寺の釈迦像は中国に伝来した優填王像を平安時代に入宋した尙然が模刻して請来したものであった。ここに語られるのは、尺尊から優

填王像へ、さらに優填王像から法皇へ、法が付属されたということである。人々を救済する力が、時代と地域を越えて継承されていくことが示されている。このような澄憲の言葉により、後白河法皇自身が生身の仏と同様の存在となる。この時の法皇は四天王寺で灌頂を受けた金剛仏子の玉躰でもあった。生身の仏としての法皇は、清涼寺釈迦像から末世の衆生を救う力を付与されることで完成する。それを唱導という営みを通して実現したのが澄憲であった。

前節で確認したように、弁暁は仏道修行により天魔を退け、生身の仏のように崇められる法皇像を、法会の場合を通して世間に発信していた。そしてこのような法皇像は、延慶本『平家物語』の法皇御灌頂物語に描かれる「金剛仏子」の法皇像へとたしかに継承されていた。それは澄憲が描いて見せたような、仏法の付属を得て日本国の衆生を救済する力を得た法皇像は、物語にどのような影響を及ぼしているか。慎重に検討していく必要がある、ここでは十分な考察を展開することはできない。だが、唱導により生み出された後白河法皇を見ていくことで、『平家物語』が持つ性格の重要な一面が明らかにできるだろうという見通しは最後に示しておきたい。

六、おわりに

ここまで弁暁や澄憲が後白河法皇をめぐって、どのようなメッセージを発信していたかに注目してきた。ここでは末世の民衆を救済する理想の法皇像が生み出されていた。では一体なぜ、弁暁や澄憲はここまで法皇を礼讃し、美化したのか。弁暁や澄憲、またそれぞれが所屬する宗や寺院の思惑や利害が絡んでいた面もあろう。しかし、本稿ではむしろ、弁暁や澄憲といった唱導僧が、宗や寺院を越えて連携して

いることを重視したい。この時代、弁暁や澄憲を含む四箇大寺（延暦寺・園城寺・東大寺・興福寺）の唱導僧が、後白河法皇を中心に集結し、活発な活動を展開していた。理想の法皇を生み出すことは、後白河法皇と各寺院の唱導僧が共同で成し遂げようとしていたことであつた。²⁴それはなぜ必要であつたのか。その理由の一つは、後白河法皇の時代に大規模な内乱が起り、多くの死者が出たことであつたと考へたい。後白河法皇は死者に向き合う必要がある、それに応えたのが弁暁や澄憲の唱導であつた。ここに、唱導と「鎮魂」という問題が浮かび上がる。これが唱導から『平家物語』の性格を考えるための一つの通路になる。

その際、たいへん参考になる文章が近年発表された。「鎮魂」について述べた佐伯真一氏の『平家物語』は鎮魂の書か²⁵という短文である。「鎮魂」という言葉は、前近代の文献ではほとんどが鎮魂祭に関わる用例であり、「身体から遊離した、あるいは遊離しようとする霊魂を体内に呼び戻し、鎮めて、生命力を活発にすることで寿命の永続をはかる意」（『日本民俗大辞典』）という意味であつたが、近代以降、「死者の霊を慰め鎮めること」（『日本国語大辞典』「鎮魂」第三項）で用いられることが多くなつた。したがつて『平家物語』や軍記物語を「鎮魂の文学」と言う際には注意が必要だが、研究史において「鎮魂」の概念が重要な役割を果たしてきたことは確かであり、あらためて「鎮魂」の内実を考え直してみるべきことに注意を促したものである。

この「鎮魂」について、佐伯氏は『平家物語』の研究史では大きく二つの方向が探究されたとしている。一つは、死者の立場に立った語り——霊に語らせた上でそれを鎮める形の語り——を想定する方向性である。もう一つは、生者の立場に立った語り——死者の美化や死者

への同情などを盛り込むことで死者を慰める語り——を想定する方向性である。ただ、どちらで考えても、現存の『平家物語』を全て説明することはできないと指摘し、第三の「鎮魂」を考えてみる必要があるとされている。それは、「威圧・説得の鎮魂」である。例として、建久八年（一一九七）の源親長敬白文があげられている。ここでは清盛が行つた南都焼討や法皇幽閉を批判しているが、趣旨は平家批判ではなく、恨みや悲しみを含んだまま戦乱で命を落とした軍兵の霊を鎮めることにある。その方法は、死者達を説得することである。すなわち、平家側で戦つたのは国家に叛く悪事であつたのだから、源頼朝に討たれたのはしかたのないことだつたと、死者達に死を納得させようとしている。その上で、頼朝体制はその罪を寛大な立場から恕すと宣言することである。怨みの連鎖を断ち切ろうとする。佐伯氏はこのような敬白文の構造は『平家物語』とよく似ていると言ふ。『平家物語』は清盛を徹底的に批判するが、滅びゆく平家の人々に対しては、滅びを当然のこととしつつもその罪を追及せず、むしろ救済を描いていく。

第三の「鎮魂」を提案する佐伯氏の方向性は、唱導から『平家物語』を考える際の導きとなると筆者は考えている。なぜならば、「威圧・説得の鎮魂」は、唱導で展開された論理に通じると考えるからである。²⁶弁暁や澄憲の唱導は、勝者である後白河法皇の立場から繰り広げられた。まずはその言説が、『平家物語』の構造に決定的な影響を与えている可能性を考えていく必要があるのではないか。本稿で示した資料からは、唱導により生み出された後白河法皇像が物語の基本的な性格を規定している可能性が予測できる。そのことは、唱導における「鎮魂」が『平家物語』にとって重要な問題であることを示していると思ふ。

唱導が作り上げた後白河法皇の姿を念頭に置きつつ、唱導における

「鎮魂」のあり方を詳細に検討しなければならない。それを踏まえることで、ようやく『平家物語』の性格をよりの確に見定めることができるのではない。物語の基底にある性格は、唱導との関連性を視野に入れることで、はっきりとした輪郭を表すのであり、そうしてはじめて、唱導からどの程度、どのような形で離れたものに、物語がなっているかを問うことができるのである。

【付記】

本稿の内容の一部は、研究会「The Tale of the Heike and other warrior tales: a Japanese epic?」(二〇一七年十月十九～二十日、パリ・デイドロ大学)で研究報告した内容をもとにしている。なお、本研究は、平成三十年度学術研究助成基金助成金基盤研究(C)「中世唱導資料の多角的研究」(研究課題／領域番号17K02428)による成果の一部でもある。

【注】

- *1 後藤丹治『改訂増補 戦記物語の研究』筑波書店、一九三六年、大学堂書店から改訂増補再版、一九七二年、小林美和『平家物語生成論』三弥井書店、一九八六年、武久堅『平家物語成立過程考』桜楓社、一九八六年など。
- *2 牧野和夫氏(『延慶本『平家物語』の説話と学問』思文閣出版、二〇〇五年など)らが精力的に追究してきた。
- *3 林雅彦・小池淳一編『唱導文化の比較研究』岩田書院、二〇一一年など。
- *4 「安居院流唱導書の形成とその意義」阿部泰郎編『中世文学と寺院資料・聖教』竹林舎、二〇一〇年、「平家物語と仏事儀礼」佐伯真一編『中世の軍記物語と歴史叙述』竹林舎、二〇一一年など。なお、唱導を含めた、仏教と『平家物語』をめぐる研究史については、「仏教と延慶本平家物語」栃木孝惟・松尾葦江編『延慶本平家物語の世界』汲古書院、二〇〇九年、「唱導」『平家物語大事典』東京書籍、二〇一〇年でまとめたことがある。

*5 大津雄一・日下力・佐伯真一・櫻井陽子編『平家物語大事典』東京書籍、二〇一〇年。「後白河院」の項目は佐伯真一氏が執筆。

*6 『玉葉』建久四年(一一九三)二月二十日条。

*7 牧野淳司・三好俊徳・筒井早苗・阿部美香・猪瀬千尋「国立歴史民俗博物館蔵『転法輪鈔』解題と翻刻」『国立歴史民俗博物館研究報告』一八八集、二〇一七年。

*8 比較的最近のものとして、遠藤基郎『後白河上皇 中世を招いた奇妙な「暗主」』山川出版社、二〇一一年、美川圭『後白河天皇 日本第一の大天狗』ミネルヴァ書房、二〇一五年を参照。美川氏は著書の冒頭で、これまでの後白河評価の代表的なものとして、武士の台頭に翻弄される古代最後の王という見方や、清盛や頼朝を翻弄した権謀術数の政治家というとらえかたがあると述べている。日本史学では、平清盛の政権や源頼朝の鎌倉幕府との関係の中で、後白河がどのような政治家であったかということが議論の中心となってきた。

*9 神奈川県立金沢文庫編『称名寺聖教 尊勝院弁曉説草 翻刻と解題』勉誠出版、二〇一三年。また、ごく最近、鎌倉時代の唱導僧である湛容の唱導資料も公刊された。納富常天『金沢文庫蔵 国宝称名寺聖教 湛容説草 研究と翻刻』勉誠出版、二〇一八年。

*10 「国立歴史民俗博物館蔵『転法輪鈔』解題と翻刻」(前掲)。

*11 「表白論の射程——寺社文化圏と世俗社会との交錯」大橋直義・藤巻和宏・高橋悠介編『中世寺社の空間・テキスト・技芸』(アジア遊学一七四)勉誠出版、二〇一四年。「天下乱逆をめぐる唱導——弁曉草と延慶本『平家物語』——」日下力監修、鈴木彰・三澤裕子編『いくさと物語の中世』汲古書院、二〇一五年、「唱導資料から見る堂舎建立と造仏の営み」『説話文学研究』五三、二〇一八年など。

*12 前掲の美川圭氏著書は、従来の後白河研究を一変させたものとして榎橋光男氏の研究(『後白河法皇』講談社選書メチエ、一九九五年)に言及している。榎橋氏は民衆をとらえる高度な文化の政治性を後白河が生み出していたと考えていた。美川氏は、榎橋氏の研究を受け、「いったい後白河は民衆をとらえたのであろうか。なぜ、後白河のもとで内乱が激しさを増したのだろうか」という疑問のみに著書を執筆した。以下、本

稿では、後白河法皇のもとで行われた澄憲や弁曉の言説に着目する。唱導は参集した聴衆の眼前で行われ、大勢の人々にメッセージを発信する行為である。したがって、唱導資料に注目することは、後白河が作り上げた民衆を巻き込む文化の政治性の一面を解明するものと位置づけることができるかもしれない。

*13 本稿は注11の論文で述べたことを踏まえつつ、あらためて、後白河法皇を中心に据えて、唱導と物語との関係性を考えたものである。

*14 堂供養上帖は、僧侶の堂供養を集めているが後欠であり、六篇しか残存していない。松殿基房関係の表白を集めた帖は、基房とその妻が主催したものであり、松殿という特定の場で澄憲が行った唱導の姿を伝えている。密教関係の帖は澄憲自身や九条兼実、慈円が行った修法が中心となっている。これに対し、堂供養下帖は、様々な施主の要請に応じて作成した表白を収録している。今回、考察の対象とする所以である。

*15 引用は前掲の翻刻により、私に訓み下した。

*16 歴博本『転法輪鈔』に含まれる東国関係の表白については、説話文学会シンポジウム「神仏の儀礼と宗教空間を担うもの——唱導・仏像・仮面」の報告（二〇一七年六月二十四日、於名古屋大学）、金沢文庫主催運慶展シンポジウム「運慶と東国の宗教世界」（二〇一八年二月十八日、於横浜市立大学）で報告を行った。詳細は別稿を用意している。

*17 『称名寺聖教 尊勝院弁曉説草 翻刻と解題』（前掲）による。分類番号三三六函一一四号三七。訓み下しにし、表記をあらためて引用した。

*18 延慶本『平家物語』の引用は汲古書院の影印版により、表記をあらためてある。

*19 本節の内容は、「表白論の射程——寺社文化圏と世俗社会との交錯（前掲）で述べた内容の一部である。

*20 分類番号三三六函一四号。この帖については、渡辺匡一氏（『後白河院と四天王寺——金沢文庫蔵唱導資料「弁曉草」から——』『仏教文学』二〇一五年、二〇〇一年）が論じているのを参照できる。

*21 本節の内容は、「天下乱逆をめぐる唱導——弁曉草と延慶本『平家物語』——」（前掲）で述べた内容の一部である。また、関連する論考として、牧野淳司「後白河法皇の王権と平家物語」石川日出志・日向一雅・

吉村武彦編『交響する古代 東アジアの中の日本』東京堂出版、二〇一一年がある。

*22 第五之五「天王寺御逆修第七日讚歎阿弥陀」（於天王寺讚嘆^{後白河院}）。金沢文庫の紙焼き写真に拠り、訓み下し、表記をあらためて引用した。

*23 永井義憲・清水宥聖編『安居院唱導集 上巻』角川書店、一九七二年による。

*24 弁曉・澄憲が園城寺・興福寺の唱導僧とも連携していることは金沢文庫保管『転法輪鈔』後白河院帖から確認することができる。

*25 佐伯真一「『平家物語』は鎮魂の書か」松田浩・上原作和・佐谷眞木人・佐伯孝弘編『古典文学の常識を疑う』勉誠出版、二〇一七年。

*26 たとえば、弁曉がいかに後白河法皇を擁護し、死者たちに死を受け容れさせる論理を展開しているか、その一端は「天下乱逆をめぐる唱導——弁曉草と延慶本『平家物語』——」（前掲）で触れた資料からも見て取ることができる。